



第11回 論語指導士 西井 秀樹 (第百二十二号) 兵庫県

活動報告から

私は、論語指導士となってから毎月大阪で開催の加地伸行先生の論語講座「論語を読もう」―古典の知恵に学ぶ―を受講してきました。毎回講座受講後は、その日に学んだ論語やその他について、情報発信する活動（Web上で公開する程度ですが）をしてきました。私が参加しやすい環境にいたこともあって、この3月末で当講座が一旦お休みとなるまでの約2年の期間、内1回だけ仕事都合で欠席し、この3月はコロナの影響で開催中止となりましたが、ほぼ皆勤でこの活動を続けてきました。その他、論語指導士研修会に参加したあとも、上記同様、情報発信をしてきました。

ほかには仕事都合などで不定期ですが、神戸市須磨区で毎月一度日曜日の朝に開催されている「子ども論語塾」にわが子たちを誘い一緒に参加しています。その日に学んだ論語を、上記同様、情報発信することをしてきました。

子張第十九の十三

「子夏曰く、仕えて優なれば、則ち学ぶ。学ばて優なれば、則ち仕う。」

日々仕事に生活に忙しいですが、寸暇を惜しんで古典の知恵に学ぼう。

現状に対する思い

この度の新型コロナウイルスで亡くなった著名人のご遺族は、棺で眠るご遺体に対面できず、火葬にも立ち会えなかったという。この報道について私は、

「喪」について考える機会となりました。喪儀の目的は悲しみを遠ざけていくことであり、大切な方との最後のお別れができなかった悲しみは、はかり知れません。

死後について日本人は、古くから次のような感覚を持ち合わせ、亡くなった方と交流してきました。それは、儀式において匂いのよい煙を上げて、天上にいる「魂(こん)」を呼び戻し、匂いの良いお酒を撒いて、その香りで地下にいる「魄(はく)」を呼び戻します。「魂」と「魄」は現世に招き奉(たてまつ)り、死者と生者とが再会することができます。生の世界に戻ってくるのであります。現世に生きる私たちもこの約束、今日でいう慰霊があるとき、死は怖いけれども、死後の安心感が生まれるのであります。

述而第七の九

「子、喪有る者の側に食するとき、未だ嘗て飽かず。子 是の日に於いて哭すれば、則ち歌わず。」

こころで感じる事が大切です。哀しみを尽くす。



「加地伸行からの百字答礼」

西井秀樹様へ

儒教の根本は、死者（それも祖先）を祀ることです。そこに儒教の宗教性があります。どうかこのことを中心にすえて論語をお読みください。儒教は、道徳性と宗教史との二つをみごとに兼ね備えているのです。